

# 生駒検定<全国版>

## <問15> 生駒は日本神話の里 (その2)

日本書紀には、次のような「**国生み神話**」が記されています。

男女二神は、**8つの洲しま(島)を生んだ**。これにより**大八洲国**おおよしまのくに(多くの洲からなる国、または、8つの洲しまを元とする国の意で、日本の異称)という名が起こった。**次に海を生んだ。次に川を生んだ。次に山を生んだ。**

この神話は、次のような、人は洲から内陸に向かうという、この神話をつけた人々の国土観を伝えています。

すなわち、縄文時代の末から海の向こうより船に乗ってやって来た人々は、まず8つの洲しまに住み着いた。次に、その周辺の海を、更には遠くの海を自分たちのものにしながら海辺に活動拠点を設け、そこより山麓・山中の川を遡り、その沿岸沿いに居住・農耕などの活動範囲を拡大していった。このようにして、後に日本と呼ばれる国土が形成された。

なお、当初、新しく日本にやって来た人々が居住・活動できる場所としては海辺や川沿いの段丘はありましたが、**のちの平野部分はほとんど海水で覆われていました**。つまり、日本列島は島と海辺と川と山だけだったので、「国生み神話」には平野(平地)を生んだという表現はありません。なお、3世紀末に記された魏志倭人伝に「倭人は帯方の東南大海の中にあり。**山島**やましまに依りて国邑くにむらをなす」となっているように、3世紀中頃(日本では弥生時代末)の卑弥呼の時代になっても、「山島」(山が海ぎわまで迫っていて平地に乏しい地形)と呼ばれる地形が日本の地形でした。

ところで、大八洲国という名の起こりの8つの洲とはどこでしょう。日本書紀本文では、「淡路洲あわじしま(現淡路島)」、「億岐洲おきのしま(現隠岐島)と佐度洲さどのしま(現佐渡島)という双子の島」、「大洲おおのしま(現周防大島/洲を「クニ」と読んで大洲おおくニ=大国=出雲、とする説もあり)」、「吉備子洲きびのこしま(古代には島だった現児島半島)」の4洲(双子の島は1洲と数える)と、「豊秋津洲とよあきつしま(本州、または本州にあった洲)」、「伊予二名洲いよのふたなしま(四国、または四国にあった洲)」、「筑紫洲つくしのしま(九州、または九州にあった洲)」、「越洲こしのしま(越前~越後にあった洲)」の4洲を記しています。

後の4洲の比定地については、諸説がありますが、豊秋津洲について、最近、下に掲載した3つの地図(各地図の出典等は、解答・解説に記載)などに示された古代の畿内きない(大和・山城・河内・摂津・和泉)の地形を考察した結果、**豊秋津洲を、大阪湾に浮かぶ島から大阪湾に突き出た島状の半島に地形を変化させてきた現生駒市に比定**する説が出されています。この説に従えば、まさに生駒は日本国土の根(ネ/根本・基礎)だということになります。

このように注目される「国生み神話」において、大八洲国の名の起こりの8つの洲しまと海・川・山を生み出した女神とは誰ですか。次から選んでください。

- アマテラス (天照大神あまてらすおほみかみ)      イザナミ (伊弉冉尊いざなみのみこと)
- アメノウズメ (天鈿女命あめのうずめのみこと)      ツクヨミ (月読命つくよみのみこと)

## <問16> 仏教建築美術

東京の中央部に位置する港区には、3つのホテルとコンベンション施設や貴賓館等が立ち並ぶ広大な**プリンスホテル高輪エリア**があります。

このエリアの中心は、約2ヘクタールに及ぶ「**日本庭園**」と呼ばれる大庭園で、そこには、滝を持つ大きな自然池や茶寮さりょう・鐘楼しょうろう・茶室のほか、山門を持つ御堂みどうが配置されています。この御堂は、人々に慈悲をもたらす**十一面観世音菩薩**かんぜおんぼさつを安置しているので「**観音堂**」(↓写真)と呼ばれています。



出典：プリンスホテル高輪エリアのHP

この、日本の自然美・伝統美を現出した「日本庭園」は、国内外から来京する人々や東京という大都会で働き居住する人々の癒しと憩いの場所となっていますが、実は、「日本庭園」の中心をなす「観音堂」は、**生駒のある寺院にあった三重塔の初層(一階)部分**を移築したものです。

ある寺院とはどこでしょう。次から選んでください。

- 長福寺      竹林寺      長弓寺      圓證寺

## <問17> 「生駒」の語源・由来

生駒の語源・由来については次のような諸説があります。

高原だから「イ(接頭語)・コマ(高原)」。放牧地があったから「イ(接頭語)・コマ(駒=馬)」。奥まった小盆地があるから「イ(接頭語)・クマ(隈)→イコマ」。大和の国の西方の隅すみに位置するから「イリ(入り)・クマ(隅)→イコマ」。分かれ嶺があるから「クマル(分)→イコマ」。生駒への渡来人の国にちなんで「イ(接頭語)・コマ(高句麗)」。

これらはいずれも、古くとも弥生時代にまで遡さかのぼって当時に使用されていた言語で生駒がどのように呼ばれていたかに語源・由来を求めるものですが、生駒にはすでに弥生時代以前の縄文時代に人が住まいしており、この時代にまで遡ったものでないのが定説(ある事柄について、その説が正しいと広く認められている説・学説)とは言い難いものです。

ところで実は、縄文時代に使用されていた言語で生駒がどう呼ばれていたかに生駒の語源・由来を求めた、次のような定説とすべき説があります。

**縄文時代に生駒付近に住まいしていた人々(縄文人)の**ことを日本書紀は**愛瀨詩(えみし)**と呼んでいる。これは、三文字とも麗わしい文字を使用しているように尊称である(「瀨」は水の盛なさま、「詩」は志が言葉となったもの、という意で、愛瀨詩とは、愛のみちわたる言葉を話す人々という意味になる)。日本書紀は愛瀨詩を「**一人で百人に当るほど強いが、戦わない人々**」と畏怖・畏敬の念を持って紹介している。この愛瀨詩(縄文人)が使用した縄文語の研究によれば、「イコマ」はもともと「イ・コマ」ではなく「イコ・マ」であり、**イコ・マの語源を遡れば、イコ・マ→イク・オマ→ユック・オマー(yuk-oma)となり、ユック・オマーとは、ユックがオマー(そこにいる。)という意味である**。ユックとは、当時、生駒山にたくさん生息していたある動物のことである。

縄文時代、**水の豊かな生駒山系一帯の、木の実の豊かな雑木の原始林**には狩猟対象の動物が沢山棲息し、縄文人にとって**生駒山は四季を通じて獲物の宝庫**で、山に分け入って狩りさえすれば山の幸が必ず授かり人々は飢餓におち入らずに済んだという有難い山でした。そこで誰が言うともなく、この山は「(獲物の)ユックがそこにいる」山、すなわち「ユックのオマー(そこにいる)」山→「イク・オマ」の山→「イコ・マ」の山→「イコマ」の山と呼ばれるようになったのです。そしてやがて、イコマには伊古麻、射駒、瞻駒、胆駒、往馬、生馬、伊駒、伊故麻などの漢字が宛てられていきました。

それでは、縄文時代のイコマ(生駒)の山を代表し、その語源・由来となった、縄文語でユック(yuk)と呼ばれた動物の現代名は何でしょうか。次より選んでください(なお、それは、縄文語を引き継いでいるとされるアイヌ語の研究の第一人者である知里真志保ちりまは教授編纂の「地名アイヌ語小辞典」に記載のユック=yukの現代日本語訳とします)。

- ウサギ      イノシシ      シカ      キツネ

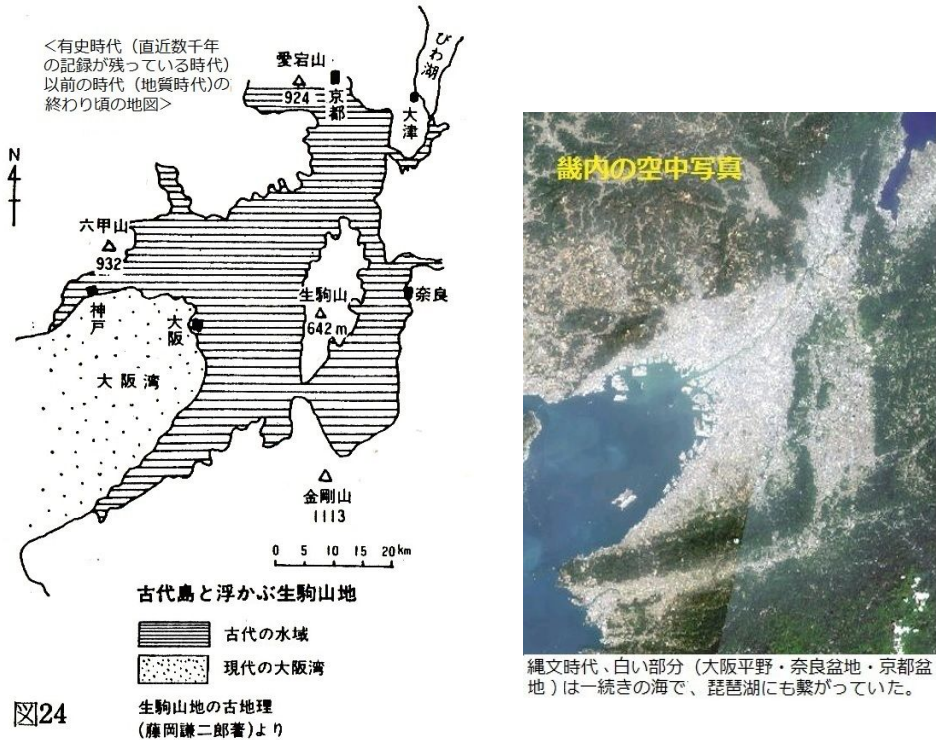
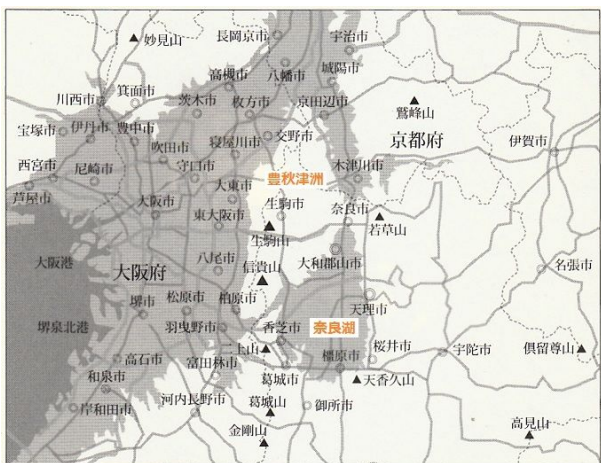


図24



海面が+60mだった頃(縄文~弥生時代)の生駒市



〈問15〉 生駒は日本神話の里（その2）

〈解答〉 イザナミ（伊弉冉尊いざなみのみこと）

〈出典等〉問題文中の3つの地図の出典等（上から順）

- ①「古代島と浮かぶ生駒山地」の出典は「生駒市誌」第一巻です。
- ②「畿内の空中写真」は、カシミール3Dを使用して作成しました。
- ③「海面が+60mだった頃（弥生時代）の生駒市」は、嶋 恵氏著の「古代の地形から『記紀』の謎を解く」から引用補筆したもので、「豊秋津洲は現生駒市」との説はこの本の中で記載されています。

〈解説〉日本書紀の国生み神話でいう「洲」は何なのか、どう読むのか、については諸説ありますが、古代には船で行けるところは途中が地続きでも、「洲＝島＝船で行くところ」として意識されるときがあったとのことであり、洲しまとは、島や半島も含め船で行き来する「海上交通の要衝」となる地域との説があります（森浩一「日本神話の考古学」第1章 国生み物語と海上交通、など）。また、「洲」は「クニ」と読むが、限定された一定領域（海に接した一地域・一地点）を指すとの説もあります（古田武彦「盗まれた神話 記・紀の秘密」、など）。これら2つの説を総合すると、「洲」を「しま」と読むか「クニ」と読むかにかかわらず、「洲とは、島・半島であるなしにかかわらず、とにかく海上交通の要衝となる地域をいう」というのが最も説得力のある説となります。

さて、今より2千数百年前までの縄文時代は、現在よりも温暖でした。そのため、三内丸山遺跡に代表される大規模集落が日本列島の北部にあったのです。温暖であるがゆえに、いわゆる「縄文海進（縄文時代での海の水面上昇による陸地への進出）」により、日本列島の平野部は海の底でした。大阪平野・奈良盆地・京都盆地（山城平野）もすべて海の底で、この3つは一繋がり的大海でした。貝塚のあるところが当時の海岸でした。縄文時代の終わりごろから、気温の低下、地盤の隆起、河口の堆積により「海水後退」が進行する中で、大阪平野は海・潟かた（砂州または沿岸州によって海と切り離されてできた湖や沼）・湿地帯という地形になり、奈良盆地や京都盆地も湖と湿地帯となりました。かかる地形における湿地を利用して弥生人は水田稲作を発展させたのです。このような、干潟や湿地帯一面に葦あし・よしが生い茂っている日本神話の舞台を葦原中国あしはらのなかつくにといひ、それは、日本列島の中央に位置する、生駒を中心部とする大阪平野・奈良盆地・京都盆地一帯、または、それより狭く奈良盆地だとする説がありますが、かかる地形では陸路は発達せず、人々の活動にとって重要だったのは船により人や物を運べる海・湖・潟や河川でした。

かかる地形において居住・活動する古代（弥生時代）の人々と現代人の私たちとは国土観が大きく異なります。私たち現代人の国土観は、まず平地（平野）があって、自分たちはそこで居住・活動する。近くまたは遠くには海があり、海で活動することもあるが、主たる活動地はやはり平地（平野）である。そして、昔、陸の隆起によって山ができており、そこから川が流れてくる、というものです（「内陸から時には海へ」）。しかし、古代の国土観は、まず、取り付く（自分たちが居住・活動するための拠り所となる）洲しま（海上交通の要衝となる地域）がある。そのまわりには海があり、そこは、船で活動する場であり、その沿岸に更なる活動拠点をつくれる。そこから川を交通の手段に利用して山麓・山中の川沿いに居住・活動範囲を拡げていける、というものです（「洲から内陸へ」）。

なお、記紀に記された国生み神話の豊秋津洲を本州という大きな島だとする説や、洲は国のことで豊秋津洲は大和の国だとする説もありますが、日本書紀は豊秋津洲が生まれたのちに海・川・山が生まれたとしているのであり、海岸・川・山から構成されている本州や大和の国が生まれたのちに、再度海・川・山が生まれたとはいっていません。

古代、本州の中の畿内にも当然海上交通の要衝があったはずであり、だとすれば、畿内の海上交通の要衝として最適であったのは、大阪平野・奈良盆地・京都盆地の要かなめの位置にあって島から島状の半島に地形を変化させていた生駒であり、やはり、豊秋津洲は古代の生駒のことだとするのが妥当な説です。

〈問16〉 仏教建築美術

〈解答〉 長弓寺

〈解説〉長弓寺の三重塔は、1279年（鎌倉時代）に建てられた本堂（国宝）とほぼ同時期（1285年頃）に建立されましたが、早い時期に二層・三層部分を失い、近世には初層（一階）部分のみしか残されていませんでした。その初層部分も、1934(S9)年の室戸台風で倒された木の直撃により本堂の屋根が大破した際、その修理費用を捻出する為に売却され、奈良の宮大工により鎌倉へ移建され補修されて「長弓堂」と名付けられたと伝えられます。戦後、西武グループの創始者の手に渡り、1954年、前年に開業した品川プリンスホテル（1978年に隣接丁目に開業の同名ホテルとは別ホテル）の庭に再移築され、「観音堂」と名付けられました。その後、同ホテルは1968年に高輪プリンスホテルと改称され（さらに2007年にはランドプリンスホテル高輪と改称）、1971年には建て

替えられました。その際、同ホテルの庭は、皇居新宮殿なども手がけた作庭家の故楠岡悌二氏により約2ヘクタールに及ぶ大庭園として整備され、日本庭園と名付けられました。

同ホテルの広大な敷地内（港区高輪3丁目南西部一帯）では、1982年にランドプリンスホテル新高輪、1990年に国際館パミール（コンベンション施設）、1998年にザ・プリンス さくらタワー東京（高層ホテル）が建てられ、ランドプリンスホテル高輪とともにホテル・コンベンションエリアを形成しました。

これが、プリンスホテル高輪エリアですが、その中心となっているのが日本庭園で、その中核をなしているのが「観音堂」であり、その周囲には、滝を持つ大きな自然池や茶寮さきょう（昭和の名建築家故村野藤吾氏の設計による1985年築の純日本様式の数寄屋造り）・鐘楼（1656年に建立されたもので1959年に奈良市の念仏寺より移築）・茶室（竹心庵）・山門（来歴不明確）、といった日本の自然美・伝統美が配されています。

「観音堂」には「十一面観音半迦はんか（踏下ふみさげ）像」が安置されています。半迦（踏下）像とは、片足を垂れ下げている仏像で、十一面観音（十一面観世音菩薩）とは、世の人々の音声を観じて「すべて（9つ）の大煩悩（苦の原因）」と「無明むみょう」（縁起の法という真理に無知なこと＝苦の最大原因）を取り除いて「解脱げだつ」（苦の超克）に導くという慈悲を下さる菩薩で、菩薩とは、如来（仏）になることをめざして世の人々を救う修行をする、いわばインターンのことです。

〈問17〉 「生駒」の語源・由来

〈解答〉 シカ

〈解説〉知里 真志保教授編纂「地名アイヌ語小辞典」では、次のように記載されています。

yuk シカ。一この語は、いま、もっぱらシカの意に用いられるが、もとは狩りの獲物の中でその肉が食料として重要であったクマ・シカ・エゾタヌキなどもさした。

この問題作成に当たっては、進藤 治氏著の「縄文言語からのアプローチ『長髓彦』の実像」に依拠しました。その依拠部分を以下に引用します。

五、縄文に遡る伝承地名を解く

「イコマ」をイ・コマと発音するのは、宛てた「生駒」という漢字の訓法通りの発音を基礎にしたからだと思われます。原初の発音がイ・コマではなくてイコ・マであった可能性を考えるべきでしょう。そのような発想でこの地名を考えてみると次のような展開でアイヌ語の感じになって行きます。イコ、マ＝イク、オマ＝ユック、オマー（yuk - oma）。則ちこの音韻をアイヌ語としてとらえると《鹿ユックが、そこにいるオマー（群れている）》という意味になります。（略）生駒の本来の意味が右のようなことでしたら関西地方でも特に濃密に、その山系全域に亘って縄文遺跡が存在している山系の名にふさわしい、いかにも縄文人が名づけたらしい地名としての説得力が感じられて来ます。その上、アイヌ語の地名としても極めて自然で妥当な語彙構成をしていて、アイヌの古い語法で物の存在を表現するのに用いられたというオマー（oma）（知里真志保著、地名アイヌ語小辞典参照）という語が何よりも古い地名表現をする語彙としての自然な感じを付与してくれています。水の豊かなこの山系一帯の、木の実の豊かな雑木の原始林には鹿や猪などの狩猟獣が沢山棲息し、縄文の狩人たちにとって此の「イコマ」の山は四季を通じて獲物の宝庫だった訳で、とにかく山に分け入って一所懸命に狩りさえすれば山の幸が必ず授かって、人々は飢餓におち入らずに済んだという有難い山だったのでしょう。誰が言うともなく、この山を「鹿がそこにいる」山、則ち「ユック鹿が、オマーそこにいる」山。イク、オマ＝イコ、マの山と呼ばれるようになったのでしょう。そしてこの具体的で簡明直截な表現が人々のコンセンサスを獲得し、地名として定着して行ったのではないのでしょうか。この様な地名は、一度生れるとほぼ無条件に後世に継承されて行くこととなります。時代が移って新しい文化と言語を待った人々が幾波にも亘って此地に入りこみ、定着して、当然この土地で話されていた言語も大きく変化し、地名発生当時の言葉が全く通用しなくなってしましますが、古い時代から語り継がれて来た「イコマ」という山の呼び名は、既に固有名詞として確定してしまっており、一種の符牒として、意味が通じなくなってしまったに拘らず忠実に後世の人々に伝承されて行ったものと考えられます。こうして何千年にも亘って「イコマ」と呼ばれた山の名を、漢字で表記しようという日が来て、遠い昔に縄文の人々が「イコマ」と呼んだ意味、由来等、誰一人として記憶している者もないままに、「伊古麻」「瞻駒」「生駒」等が時代の変遷によって適当に宛てられて現在に至った訳です。もし、そうだとすると「イコマ」という音韻はアイヌ語のユック、オマー《鹿がそこにいる》という言葉に近似した音韻と意味を待った、少くとも縄文期の何時の頃かからこのあたりにも分布していたエミシ語の片鱗を示して呉れている貴重な伝承地名だということになります。